

より歸り給ひし時には、必ず召出し給ひ、かしこにおはせし程の事など、物語し給ひて、時移りし後に、暇給はりて退き出づ、留守の事とひ給ふ事、おはせざりきと宣ひき。

〔先哲叢談^三〕山崎嘉字敬義、小字嘉右衛門、號闇齋。

初來江戸時、寒窶無儋石、故鄰書商賃居、以借閱其書、當是時、井上侯好學下士、書商亦數謁見、一日侯謂商曰、寡人將學、爾之所知、有足爲人師者、請爲介、商曰、近有一儒生山崎嘉右衛門者、自京師來住、小人東家視其所以、度越尋常、閣下而召之、其得不虞之幸福也、豈不感奮思答恩乎、侯大喜、乃延致商歸、告闇齋、闇齋毅然曰、侯欲問道、則先來見、商憮然以爲措大不通時勢、若薦若人、必陵上無法、累自及、不若不薦也、他日侯復問曰、疇昔所告山崎生如何、商曰、小人非惰也、前日既傳命於渠、渠曰、侯先來見、余是非頑愚不可曉、卽狂率邀名也、請別選通儒、侯咨嗟良久曰、方今自稱師儒者、多無意行道、東奔西走、欲其技易售、而寡人聞之、禮聞來學、不聞往教、山崎生能守之、此乃眞儒也、卽日命駕訪其居。

〔山崎闇齋先生事業大概〕會津侯松平肥後守正之君博學大才、諸子百家の書に涉て、人傑也、河内守と懇意に

て、度々參會あり、ある時肥後侯來り給ふ、河内侯則先生を頼れし始末を語り給ふ、肥後侯相見事を求たまふゆゑ、先生座敷へ出らる、肥後侯座を立て、次の間まで迎へ給ひ、引て對坐あり、學談に及ぶ、肥後侯頻に先生を招請有たく、求給ふ趣なり、其後彌其旨を通達あれども、先生辭するに、河内侯に先約あるを以てす、河内侯曰、會津侯は我に比すれば、德澤の及ぶ所も廣かるべし、我に變約のいとひなく行るべしとて、進め頼みたまふ、之からば御政道一人に被任るならば、可參と申さる、いかにも任せ申べきよしにて、終に會津侯の方へ行れしに、太守師範、家老の上座にて、合力として、百人扶持送られぬ。

〔先哲叢談^{後編}二〕山鹿素行

赤穂侯長友淺野内匠頭親執弟子禮、請教與素行往來、數年於此、其虛左優遇異於他、承應元年壬辰春、贈